九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

近世中期の思想と文学 ： 天文暦学・本草学との関わりから

吉田, 宰

https://hdl.handle.net/2324/4059958

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏　　名　：吉田　宰

論 文 名　：近世中期の思想と文学―天文暦学・本草学との関わりから―

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、近世中期の思想と文学について、これまでの人文科学系の研究からは考察対象外とされる傾向にあった、天文暦学・本草学という、いわゆる自然科学系の学問との関わりから、その様相を解き明かすことを目的としたものである。

第一章「西村遠里と書肆銭屋―『万国夢物語』から『居行子』『雨中問答』まで―」では、近世中期の天文暦学者・西村遠里を取り上げた。彼は天文暦学書の執筆はもちろんのこと、後半生においては、『居行子』（安永 4 年〈1775〉刊）や『雨中問答』（安永 7 年〈1778〉刊）など、多くの随筆を著した。しかし、その彼が後半生、天文暦学書から随筆の執筆へとその比重を移していった要因については、いまだ十分な考察が備わっていなかった。

そこで、本章では遠里の思想について第二章で考察する前段階として、『居行子』や『雨中問答』などの随筆が刊行されるに至った要因を外的側面から、すなわち刊行の「場」がいかにして形成されていったのかについて明らかにすることを目的とした。その際、遠里が天文暦学書から随筆の執筆へと移行する、まさに過渡期に位置する著作として、海外地誌を中心に記した『万国夢物語』（安永 3 年〈1774〉自序）という写本があるのだが、この著作に着目することで問題解決の端緒についた。

第二章「西村遠里随筆考―蕃山学の受容を中心に―」では、これまで十分に論じられてこなかった遠里の随筆を中心に、彼の思想的特徴を明らかにすることを目的とした。その際、彼の思想に大きな影響を与えた蕃山学、さらには遠里と類似する学問姿勢を持つ天文暦学者・西川如見との関連についても考察した。そして、西村遠里という一人物内において、蕃山学と天文暦学とがいかに結びついていたのかを明らかにした。

第三章「後藤梨春と書肆鶴本」では、近世中期の本草学者・後藤梨春を取り上げた。彼は本草学書や蘭学の知識を取り入れた著作を著す一方で、『都老子』（宝暦 2 年〈1752〉刊）や『竜宮船』（宝暦 4 年〈1754〉刊）といった戯作を著した人物でもある。

本章では、その梨春に関する学問思想を詳述する前段階として、梨春の著作が刊行される「場」がどのように形成されたのか、第一章と同じく書肆との関わりから考察した。

第四章「後藤梨春『都老子』論―梨春の本草学と老子の思想との関連―」では、老子の思想を織り交ぜて書かれた梨春の戯作『都老子』を扱った。本書については、つとに中野三敏が近世中期における老荘思想の流行の中で位置づけてはいたものの、なぜ本草学者として活躍した梨春が老子の思想を受容したのかについては、従来考察されていなかった。

そこで本章では、梨春が老子の思想を受容した要因について、彼が身につけていた本草学と老子の思想との思考態度における共通性から考察を加え、その問題の解決を図った。そして、後藤梨春という一人の人物内において、梨春の本草学と老子の思想とがどのように関連し合っていたのかを明らかにした。

第五章「平賀源内『根南志具佐』のカッパ図」では、平賀源内の戯作『根南志具佐』（宝暦13年〈1763〉刊）に挿絵として描かれるカッパ図を扱った。なお、源内は第三章および第四章で取り上げた梨春と本草学を介した学友であり、梨春と源内はともに本草学を田村藍水から学んでいる。

本章で取り上げる『根南志具佐』については、これまでにも様々な作品論が存在するが、挿絵として描かれるカッパ図に注目したそれはなかった。しかし、本書に描かれるカッパ図の成立背景には、源内と本草学との密接な繋がりがあり、またそのことを踏まえると、本書には新たな読みが導入可能となる。

そこで本章では、これまで看過されてきたカッパ図に着目することで、源内がカッパ図に込めた意図を明らかにし、その上で本書の読解に関して新たな読みを提示することを目的とした。また、『根南志具佐』『同後編』（明和 6 年〈1769〉刊）における作品構造上の趣向の類似についても新たに指摘し、さらには本草学を介した人的交流が源内の戯作の形成に影響していることに関しても私見を述べた。

このほか、付論「上田秋成「貧福論」考―浮世草子・談義本からの継承と発展―」では、上田秋成が著した読本『雨月物語』（安永 5 年〈1776〉刊）に収録される「貧福論」について、これを浮世草子や談義本といった読本以前の文芸ジャンルとの関連から位置づけた。

また付録「西村遠里『居行子』―解題と翻刻―」では、西村遠里が著した随筆『居行子』について、その解題と翻刻を施し、今後の研究に資するための資料紹介を行った。

以上、本論文では西村遠里・後藤梨春・平賀源内の三名を中心に各論を構成した。そして、今日でいう人文科学と自然科学との垣根を超えた、分野横断的視点から考察を加えることで、本論文は近世中期の思想と文学の新たな一側面を明らかにした。